

Title	<大會抄録>「錢神論」の時代
Author(s)	葭森, 健介
Citation	東洋史研究 (1992), 51(3): 515-516
Issue Date	1992-12-31
URL	<a href="http://dx.doi.org/10.14989/154413">http://dx.doi.org/10.14989/154413</a>
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

## 大會抄錄

居延出土の貰買賣簡をめぐって

角谷常子

漢代、對匈奴防衛の據點であった居延から大量に發掘された、いわゆる居延漢簡の中には、卒や吏が行った賣買に關する文書や記録などがあり、これらの經濟生活を知る上で貴重である。特に、錢で俸給が支拂われていたこととも合わせ、さかんに貰賣買（かけ賣り・かけ買ひ）が行われていることから、當地において貨幣經濟が發達していたこと、さらに官側が借金取り立てに強く関わっていたことなどが、從來から指摘されている。

しかし、賣買といっても誰と誰がどのような物を取引していたのか、また様々な形式や内容をもつ關係文書や記録はそれぞれどのような過程で作成されたのか、といった基本的な事柄は専らには論じられていない。そこで本報告では、關係諸簡を整理分類し一つの流れの中に位置づけるとともに、個々の取引の事例を集め、その特徴をつかむことにする。

さらに漢簡によれば、全ての面で文書の上では、人も物も厳しい管理下におかれていたことがわかるが、これらの賣買に對しても官は不正が行われぬよう、「管理」という役割を果たしていたのだろうか。これら取引の事例はあくまでも私的なものであるが、上述の作業の結果をふまえて、このような卒や吏の私的な經濟活動と

官（具體的には候官）との關係にも考察をすすめてみたい。

### 「錢神論」の時代

葭森健介

六朝貴族をどうとらえるかは中國史研究上の論争點の一つであった。當時の史料を見ると、貴族の家柄、人格や才能、評判、官職、政治姿勢、全てについて「清」という語が使われている。「清」は、基本的に、清廉潔白という經濟的倫理性と深い関わりを持つ。しかし、貴族制の轉機に當たる西晉末において、「錢」即ち富の力で貴族としての政治的、社會的地位を獲得しようとする人々の姿を生々しく描き、諷刺した「錢神論」が書かれている。西晉の全國統一後、活潑化する商品流通と貨幣經濟の進展の中で、貴族は奢侈生活に耽り、一方經濟力により擡頭した寒門寒人が八王の亂に乗じて政治の表舞臺に登場する。こうした状況を背景に賄賂等による榮達の道が開かれ、經濟的實力（富）によって政治的地位を得ようとする風潮が強まった。これは「清」なる人格により社會的名聲を得、それにより政治的地位（貴）を高め、ひいては「富」をも獲得し得るという貴族制、及びこれを支える九品中正制度の理念と眞つ向から對立するものである。こうした「錢神」に代表される「濁」の現實と「清」理念の對決、葛藤が「錢神論」が書かれた背景にあったと考えられる。その中で、「清」の理念を堅持する「士大夫」が六朝貴族制を展開させる上での擔い手となった。六朝貴族制とは、利

欲追求を肯定する「濁」の發想と、これを社會秩序を亂すものと排除する「清」の理念の格闘の中で成長したと言えるのではないだろうか。

## 兩漢時代の市と市邑

紙屋 正和

秦漢時代の市については、これまでに長安九市の位置、市の構造、市籍の性格、官による市の規制、市の營業品目、市の遊民・遊俠、市での處刑などに關する研究が積みかさねられ、市の外形についてはかなりわかつてきた。とくに佐原康夫氏の近年の勞作「漢代の市について」(『史林』六八—五 一九八五年)は、都市の市(常設市)と都市からはなれた地點に存在する小市(定期市。本報告でいう市邑で、王符『潜夫論』浮侈篇には「市邑萬數」とある)との關係を明らかにして閑然するところがない。本報告はこれらの研究をふまえて、兩漢時代の市・市邑で行なわれた取り引き自體について若干の考察を行なうものである。

前漢前半期には富商大賈の活躍がめだち、しかもその交易の一定部分は市外で行なわれていたため、當時の商業にしめる市・市邑の比重は相對的に小さかった。ところが武帝期の抑商政策をへて富商大賈の活力が減退した前漢後期から後漢にかけて、市・市邑の繁榮がめだってくる。これは、單に富商大賈が後退して市・市邑が相對的にうかびあがったのではなく、小農民層の購買力の向上、周邊の

莊園や小農民の作物や調理すみの食料品といった生活に密着した商品、さらには奢侈品などの増加の結果おこったのである。かくて、かつての都市の遊民はともかく、小農民層との關係のうすかった市・市邑が、周邊の庶民の生活と有機的な關係をもつてきた。

## 一九三〇年代江蘇省無錫縣の

農村調査をめぐって

奥村 哲

舊中國農村經濟の調査では、滿鐵のそれが總合性・科學性において高く評價されている。華中についても、滿鐵上海事務所による無錫など六縣の農村調査のデータをもとに、多くの研究が發表された。しかしそれらの調査は、日中戰爭中に敵國日本が行なったものであり、それ故の制約が大きく、そこから直ちに戰爭前の農村の状況を導くことはできない。農民の回答の信憑性を除いても、調査地の選定の問題や戰爭による變動などが考慮されねばならないからである。從來の研究がこうした點に留意していない譯ではないが、十分とはいえない。可能な限り他史料と突き合わせて、滿鐵の調査を相對化する必要があるが、頼れる他史料がさほど多くないからである。

無錫は中國近代經濟史において獨自の地位を占めているためか、例外的に他史料は豊かである。まず一九二九年に、後の「中國農村派」の主要メンバーによって、二二村の二二〇七戸の調査が行なわ